

試験研究成果普及情報

部門	花植木	対象	普及
課題名：鉢花イチゴ「桜香」「紅香」の3月上旬出荷技術			
[要約]「桜香」「紅香」とともに11月上旬までに鉢上げを行い、12月上旬より最低夜温10℃で加温を開始し、ミツバチを放飼すると、3月上旬までに着色果実を1果以上つけて出荷可能である。			
キーワード イチゴ、鉢花、作型、桜香、紅香			
実施機関名	主 査	農林総合研究センター・生産技術部・花植木研究室	
	協力機関	野菜緑化育種研究室	
実施期間	2007～2008年度		

[目的及び背景]

本県で新たに育成されたイチゴ2品種「桜香」、「紅香」(登録名称は「千葉S05-3」)は、花色がそれぞれ桃花と紅花で、従来の観賞用イチゴに比べ花が大きく、食味がよい等、鉢花としての新たな需要が期待される。イチゴの鉢物の多くは実取り用親株や緑化素材としての苗物流通が大半である。そのため、鉢花としての基本的な栽培管理方法や作型に関してほとんど研究されていない。そこで、需要が見込まれる3月上旬出荷作型での栽培管理技術を確立する。

[成果内容]

- 1 ミツバチを放飼することで、「桜香」の第1果の果実重は増加する。(表1)。
- 2 11月上旬に定植し、12月上旬より最低夜温10℃に加温を開始し、1月以降ミツバチを放飼することで、1番果着色日が「桜香」は10日程度、「紅香」は1か月程度早まり、3月上旬までに出荷が可能である。
- 3 3月上旬出荷の作型では奇形果の発生が顕著となるが、12月上旬に加温を開始しミツバチを放飼すると、「桜香」「紅香」とともに第1果から奇形果はなく、鉢花イチゴとして出荷可能となる。

[留意事項]

- 1 定植時に出蕾している頂花房は摘除し、草勢維持を図る。
- 2 品種特性上小さい鉢でも、株張りは大きくなる傾向があるが、草勢維持するには5号鉢が望ましい。
- 3 生育中は、炭そ病やハダニ類やアザミウマ類の発生が懸念されるので、栽培環境に十分配慮し、防除に努める。

[普及対象地域] 県下全域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

表1 ミツバチの放飼の有無と加温開始時期が鉢花イチゴの生育、開花に及ぼす影響

処理区		草丈 (cm)	株張り (cm)	葉数 (枚)	果実重 (g)	第1果 着色日	着蕾数	花房長 (cm)	3月1日時 第1果着色 鉢率 (%)	第1果奇形 鉢率 (%)	
品種	ミツバチ 加温時期										
桜香	有り	12月10日	12.2	24.8	10.9	15.9	2月19日	11.1	18.7	90	0
		12月26日	10.3	20.0	9.4	11.4	3月1日	9.3	14.2	90	0
		1月14日	13.0	23.0	10.3	8.1	3月7日	9.9	14.9	30	50
	無し	12月10日	9.8	24.3	12.5	8.7	3月5日	15.5	15.2	50	50
		12月26日	8.8	20.0	10.4	9.3	3月15日	10.1	13.7	30	40
		1月14日	9.9	21.0	11.0	6.1	3月17日	11.6	13.9	10	60
紅香	有り	12月10日	12.7	30.6	13.7	7.2	2月28日	15.7	19.1	60	0
		12月26日	11.3	22.8	10.0	7.9	3月7日	11.7	16.3	40	0
		1月14日	13.7	25.1	10.8	5.6	3月18日	9.6	14.7	0	20
	無し	12月10日	10.4	30.1	15.1	9.2	4月1日	24.7	19.9	10	90
		12月26日	8.7	21.7	11.2	4.7	4月2日	13.8	15.4	0	90
		1月14日	9.9	20.7	12.6	8.4	3月17日	11.6	14.0	0	20

注1) 定植日: 2008年11月5日(5号鉢)

注2) 基肥として培養土1L当たり緩効性化成肥料(マグアンプK中粒、6-40-6)を3g混入した。追肥は、窒素成分で100ppm(20-20-20)の液肥を加温開始後2週間に1回、開花まで施用し、さらに、プロミック中粒(12-12-12)を鉢上げ後1か月おきに、鉢当たり1粒(1g)ずつ施用した。

[発表及び関連文献]

平成21年度試験研究成果発表会(花植木部門)

[その他]